「読書感想文コンクール」を実施しました

葛飾区では、教育振興ビジョンの取組の一つとして、児童・生徒の読書活動を推進するために「読書感想文コンクール」を実施しています。

今年度は、小学生1万7千854点、中学生5千763点の応募があり、360人の作品が入選しました。各部門の最優秀賞・優秀賞・佳作入選者は次のとおりです。

■小学校低学年の部

最優秀賞

青山　とも野（あおやま　ともの・東水元小2年）

優秀賞

磯　蒼杷（いそ　あおば・柴又小1年）
北澤　桜（きたざわ　さくら・柴又小2年）

佳作

望月　みのり（もちづき　みのり・松上小1年）
加藤　梨裡加（かとう　りりか・西小菅小1年）
桑原　粋楓（くわばら　すう・飯塚小2年）

■小学校中学年の部

最優秀賞

原　萌衣佳（はら　めいか・道上小4年）

優秀賞

押木　美桜（おしき　みお・花の木小4年）
安齋　菜緒（あんざい　なお・上小松小4年）

佳作

池上　清香（いけがみ　さやか・金町小3年）
中瀬　悠（なかせ　はるか・東柴又小4年）
東海　亜美（とうかい　あみ・東金町小3年）

■小学校高学年の部

最優秀賞

坂田　かなみ（さかた　かなみ・東金町小6年）

優秀賞

村上　夏鈴（むらかみ　かりん・二上小5年）
目黒　恵唯（めぐろ　めい・末広小6年）

佳作

大高　慶（おおたか　けい・上平井小6年）
大角　奏歩（おおづの　かなほ・水元小5年）
寺内　すず（てらうち　すず・幸田小5年）

■中学生の部

最優秀賞

大倉　もも（おおくら　もも・常盤中3年）

優秀賞

二階堂　裕次郎（にかいどう　ゆうじろう・金町中3年）
若松　陽菜（わかまつ　ひな・立石中2年）
鷹見　洸士郎（たかみ　こうしろう・常盤中1年）

佳作

近野　あかり（ちかの　あかり・金町中2年）
笠原　五和（かさはら　さわ・小松中1年）
藤巻　柚乃（ふじまき　うの・亀有中1年）
髙澤　馨加（たかさわ　きよか・亀有中2年）
松島　優希（まつしま　ゆうき・青葉中3年）
大川　すずか（おおかわ　すずか・葛美中3年）

（敬称略）

指導室☎（5654）8573

中学生の部・最優秀賞

「普通」とは

常盤中学校3年　大倉　もも

「普通」

この言葉は世間ではありふれた言葉で、どんなことをするにも今ではこれが人生に付きまといます。今回、私が読書感想文を書くために選んだ本は、村田沙耶香著「コンビニ人間」という本です。この本は第百十五回芥川賞受賞作品で、お店や帯の謳い文句には、「普通とは何か？現代の実存を軽やかに問う衝撃作」と書かれていました。そして確かにこの本を読んで、「普通」というものは一体どこから生まれてきてしまったのだろうという疑問が、終始、私の頭の片隅に居座り続けています。

この物語の主人公は、古倉恵子といい、三十六歳の未婚女性。大学卒業後も就職はせず、コンビニのバイトは十八年目。この主人公がこの本の重要な役割を担っています。それはなぜかというと、他人とはあきらかにずれた考え方を持っている人物だからです。小さい頃からこの主人公は異様で、公園で死んでいた小鳥を、「焼き鳥にして食べよう」と言いだしたり、小学校に入ったばかりの頃には、体育の時間、男子が取っ組み合いのけんかをしてしまい、それを止めようとした主人公は体育倉庫からスコップを取り出し、その男子の頭を殴りつけてしまったり。そんな、家族を困らせるような奇行を繰り返してきました。ここで私は思い出したことがあります。私は、このような奇行はしてきませんでしたが、以前母に、「もっと人間らしく生きなさい。普通にしなさい。」と言われたことがありました。その時、私はこの主人公のように母の言ったことの意味がわかりませんでした。私は弟にも母にも父にも今まで私なりの「普通」で接し、生きてきたのに、それをなぜ否定し、改善を求めてきたのでしょうか。私は私の生き方そのものを否定されたのでしょうか。私の「普通」と母の「普通」は違っていて母の「普通」が正しいのでしょうか。考えれば考えるほど疑問が出てきて、謎は深まるばかりで、ちっとも私はこの言葉を理解し、吸収することができません。今でもこの言葉は心に私を縛るかのように残っています。

そしてその主人公の働いている店に婚活目的の新入りの男性、白羽がやってきます。しかし白羽は勤務態度も悪く、挙げ句の果てに客に目を付け、店を辞めさせられてからも、ストーカー行為を続けていました。しかし白羽の話を聞いてみると、「ここは機能不全世界なんだ。」「この世は異物を認めない。皆が足並みを揃えていないと駄目なんだ。何で三十代半ばなのにバイトなのか。何で一回も恋愛をしたことがないのか。誰にも迷惑をかけていないのに、ただ、少数派というだけで、皆が僕の人生に簡単に土足で踏み入って、干渉してくるんだ。」と主張し、主人公と同棲することになっても働こうとせず、主人公に、「餌」を与えられるだけの生活をしていました。そして主人公を働かせ、自分は一向に働こうとせず、最後は、コンビニの音に取り憑かれた主人公に呆れ、自分から去っていきました。

この白羽という男はなんだかんだ理由をつけて働こうとしない男で、しかし、主人公が主人公だからか、そこをまったくとして気にせず、視野にも入れていません。ただ、合理的であるかないかしか考えていないので、私はこの本を読んでこの男に何度もむかついたのですが、主人公はそんなことはもろともしないので苦笑してしまい、一つやられたなと思いました。さっそく私は私の中にある「普通」でこの部分を読んでしまっていたのです。気が付かない内に。主人公には「普通」という概念がなく、何かを基準にしていないと、どうやって生きていけばよいのかもわからないほどなので、この男のことは何も思っておらず、ただ動物を飼っている。という感覚でしかないのです。

そしてそんな白羽の言っている言葉にも共感できるところがありました。「この世は現代社会の皮を被った縄文時代なんだ。」普通はとても強引だから、異物は静かに削除される。真っ当でない人間は処理されていく。私はこの言葉に深く共感しました。先程の母の発言と似ていると思ったからです。そのとき私は異物で母は普通なのであり、だから母は私に治せ。と言ってきたのかもしれません。

そして今の社会は学歴だけで就職も大きく変わってきてしまいます。家にある事情を抱えた男性が、定時制高校を出た後大学に通えなかっただけで奇異の目で見られたという話を耳にしました。男性は「形だけの大卒よりもっと中身を見る世の中になってほしい。」と言っていました。私はこの事実に衝撃を受け、今の世の中は機能不全世界だと思いました。

最後になりましたが、私がこの本から学んだことは、人は皆、一回「普通」という概念を取り払って物事に向かうべきです。小さな事にも感動できるし、キラキラしたものにあふれていると気付くことができると思います。